

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 15 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370342

研究課題名(和文) ブラジルの文化における喜劇性 ユーモア・笑い・遊戯性

研究課題名(英文) The Comic in Brazilian Culture -- Humor, Laughter and Play --

研究代表者

武田 千香 (TAKEDA, Chika)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号：20345317

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：ブラジルの文化や文学における笑いには「秩序」(ヨーロッパから導入した規範や制度)と「脱-秩序」(そこから逸脱する行為や状態)のずれを楽しむものが多い。こうした笑いの形成には、マルチンス・ペーナやフランシスコ・コヘア・バスキス、アルトゥール・アゼヴェードといった19世紀の喜劇作家らが重要な役割を果たした。また「秩序」と「脱-秩序」間の動きはブラジルの文化事象にも見られ、たとえばサンバやカポエイラの楽しみや遊び心はそれと大きく関係がある。さらにこの動きはブラジル人の行動様式といわれる「ジェイチーニョ」やサッカーの「マリシア」にも見ることができる。

研究成果の概要(英文)：Numerous jokes and comedic sayings in Brazilian culture and literature involve a play on a gap between "order" (propriety; the norms, standards and systems introduced from Europe) and "dis-order" (acts and situations that deviate from said propriety). 19th century playwrights--including Martins Pena, Francisco Correa Vasques, and Artur Arzevedo--played an important role in the formation of this comedic form. Brazilian cultural phenomena also show such interplay between "order" and "dis-order"; largely relevant here are, for example, the enjoyment and playful spirit of samba and Capoeira. This interplay can also be seen in "jeitinho," said to express the behavioral style of Brazilians, and "malicia" (cunning, deceit) in Brazilian soccer.

研究分野：ブラジルの文学・文化

キーワード：ブラジル文化 ブラジル文学 笑い ユーモア ラテンアメリカ ポルトガル語圏文化

1. 研究開始当初の背景

申請者は、マシャード・ジ・アシスの文学を中心に、19世紀～20世紀初頭にかけてのブラジルの文学を研究する傍ら、同時代のブラジルの文化の形成過程に関する知識も深めてきた。マシャードの文学について、申請当時にとくに取り組んでいたのは、その作家の最高傑作のひとつとされる『プラス・クーバスの死後の回想』である。この作品の分析を通じて明らかになったのは、植民地時代に課されたヨーロッパの制度や規範などを受け入れながらも、同時にそれとは相いれないものの存在も許容し、その両方を必要と都合に応じて自由に使い分ける術を育んだブラジルの人と文化と社会であった。(西洋から課せられた諸価値を X、それとは相いれないものを 非X として公式化すれば、ブラジル文化の形成過程は X 非X と表わせる)。

マシャード・ジ・アシスは、ちょうど『プラス・クーバスの死後の回想』を執筆していた当時、ブラジルの自然や文化事象を絵画的に取り入れることで「ブラジルらしい」文学を作ろうとした他の多くの作家とは違い、ブラジルの人や社会の表象となり得る「民衆の精神に適した」文体を書き込むことを模索していた。そして、『プラス・クーバスの死後の回想』に現われるその X 非X のリズムこそが、それだったと申請者は考えるに至った。

それを意識して、サンバをはじめとする音楽やカーニバル、サッカー、カポエイラ(武芸)など現代のブラジル文化を改めて概観すると、たしかにそこには西洋から導入された文化を踏襲しながらも、それをずらすことで独自のものを生み出した(すなわち X

非X)姿が浮かんできた。ブラジルの文化の代表格とされるカーニバルは価値の転覆を特徴としているし、「マランドラージェイン」や「ジェイチーニョ」と称されるブラ

ジルの社会遊泳術、すなわち、ときに法やルールから外れて事を成し遂げる要領のよさは、制度を保持しつつもその逸脱を利用する行動様式である。さらにそれがサッカーで発揮されると、「マリシア」と呼ばれるブラジルのサッカースタイルになる。

さてユーモアがまさに既定のものとの「ずれ」を楽しむもので、また「遊び」も、普段の仕事にはない「ずれ」のような部分を含むものである(山口昌男『笑いと逸脱』)ことを考えると、ブラジルの文化でよく指摘される遊戯性や陽気さは、その観点から説明できるのではないか。

本研究は、以上のような着想から生まれたものである。

2. 研究の目的

研究期間内には以下のことに関する研究を進めることを目標とした。

(1) [演劇] ブラジルの喜劇が形を成した19世紀前半から20世紀初頭までのブラジルの演劇の流れを追い、その中でどのように笑いが強調されるに至ったかを考察する。

(2) [歴史的背景] (1)とともに、ブラジルにおいてなぜ笑いやユーモアが重要な役割を果たすようになったかについて、その歴史的・社会的経緯を示す。

(3) [文学] これまでのマシャード・ジ・アシスの文学研究の成果をふまえ、主に20世紀前半の文学における笑いやユーモアを、代表的な作家の文学作品の中に探る。

(4) [事象検証] X 非X のリズムが、文学や演劇以外の場でどのような形で表われているかを検証する。

3. 研究の方法

研究代表者以外に、ブラジルおよびポルトガルの文学・文化の若手研究者4名を加えた5名で研究グループを結成し、ユーモアや笑いを扱う文学作品や演劇を研究する傍ら、ブラジルの文化事象において、ユーモア・笑

い・遊戯性がどのように発揮されているかを検証する。

隔月のペースで開催する研究会において、各自の研究の進捗状況や結果を報告するほか、学外から招いたブラジル文化の実践者の話を聞きながら研究を展開する。各メンバーは、ブラジルやポルトガル現地においても、担当の事項に関する資料収集や研究調査を実施する。

4. 研究成果

(1) 19世紀のポルトガル王室の到来と独立を機にじかに国際社会とつながり始め、急速な近代化を推し進めたブラジルは、近代的な思想や制度をヨーロッパから導入しながらも、前近代性を根強く社会の基盤として残していた。マシャード・ジ・アシスの文学に表われる X 非・X のリズムはその表象であった。またブラジルの人類学者のホベルト・ダマッタ (Roberto DaMatta) がブラジルの社会を読み解くためのキーワードとして挙げる「秩序 (ordem)」と「脱・秩序 (desordem)」もそれに相当する。

本研究では、19世紀に書かれ上演され、いまでも古典的作品として評価されている喜劇を通して、そのリズムと笑いの形成について考察した。研究対象として取り上げたのは、マルチンス・ペーナ (Martins Pena, 1815-1848)、フランシスコ・コヘア・ヴァスキス (Francisco Corrêa Vasques, 1839-1892)、アルトゥール・アゼヴェード (Artur Azevedo, 1855-1908) である。

ペーナによる『田舎の治安判事 (Juiz da Paz da roça, 1838)』では、「秩序」と「脱・秩序」が混在し、必要性和都合によって巧みに使い分けられるブラジル社会が描きこまれ、笑いはそのずれから生まれている。

ヴァスキスは、ペーナの『田舎の治安判事』をふまえ、オッフェンバックの『地獄のオルフェ』の舞台をブラジルに移して、そのパロ

ディ『田舎のオルフェ (Orfeu na roça, 1868)』を書いた。この戯曲では、笑いを通してヨーロッパの近代性を揶揄する原作の批判精神を踏襲しつつも、ヨーロッパに憧れ、その近代的な思想や制度を導入して「秩序」を確立しようとしているのに、どうしても「脱・秩序」が混在してしまう自国に対する自虐的な笑いも加えられている。

『地獄のオルフェ』以降、ブラジルでは、舞台を自国に移して作りなおされたフランスのオペレッタのパロディが多く書かれるようになった。それらを発展させたのが、ヴァスキスのパロディの精神を継承したアルトゥール・アゼヴェードであった。

アルトゥール・アゼヴェードは、オペレッタのパロディのほかにレビューを手がけてその名を不動のものにしたが、そのいずれの経験をも生かして「ブルレッタ」と呼ばれる音楽喜劇を作り出した。『連邦首都 (Capital Federal, 1897)』は、その代表的な作品である。アゼヴェードは、レビューの人気の大きな要因である音楽性と社会風刺に加えて、ペーナやヴァスキスに見られる田舎と都市の対比や「秩序」と「脱・秩序」が作り出す動きを描きこむことによって、ブラジルの人・文化・社会の構造的なずれを自虐的に笑う、いわばブラジル流風習劇を作り出したのである。

近代と前近代のずれによる笑いやパロディは、「ブラジル性」が追求されたモデルニズムの文芸にもよく見られるものである。本研究は、その形成過程の一端を明らかにすることができた。

(2) 「秩序」と「脱・秩序」間の動きやそのずれから生まれる笑いは20世紀の文学にも見られる。本研究では、マリオ・ジ・アンドラーヂ (Mario de Andrade, 1893-1945) の『マクナイーマ (Macunaíma)』(1928) やジョルジ・アマード (Jorge Amado, 1912-2001) の後期の小説のほか、シコ・プアルキ (Chico

Buarque, 1944-)の戯曲やアリアーノ・スアサーナ (Ariano Suassuna1927-2014) の戯曲でもそれを確認した。またポルトガルの文学でも「秩序」と「脱-秩序」の交差が認められるものが少なくないという指摘がなされた。

(3) 本研究ではまた、ブラジルの「国民性」や文化を理解するために重要な概念だとされる「ジェイチャーニョ」や「マランドラージェイン」の仕組みを明らかにできた。「ジェイチャーニョ」とは、何か困難な状況に陥ったとき、多少ルールに抵触しても融通を利かせて解決する方策のことである。これはいうなればルールという秩序から逸脱した「脱-秩序」の発想で解決を図ることで、やはりここにも「秩序」と「脱-秩序」の間を自由に行き来する「秩序 脱-秩序」の動きがある。またそれが一時的な行動にとどまらず生きる姿勢になるとマランドラージェインが使われる。

(4) カポエイラやサンバといった文化事象を理解するにも「秩序 脱-秩序」の動きは有効であることが、日本で生まれ育った実践者の話から明らかになった。日本人には規則や秩序に依拠する傾向があるが、サンバでは規格を崩したりはずしたりすることも重要で、その音やリズムは演奏者同士のコミュニケーションによって作られる。また「秩序」と「脱-秩序」のあいだでの揺れはカポエイラでも重視される。そしてその動きの先には現実社会のロジックは通じない「別世界」が立ち上がるといわれ、カポエイラで言うマンジンガという特殊な力はその領域に属するものである。

サンバもカポエイラも、いずれもズレとコミュニケーションから楽しみや遊び心が生まれる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 4 件)

武田千香、「アルトゥール・アゼヴェー

ドと『連邦首都』—ブラジル流喜劇の模索」、東京外国語大学論集第 90 号、査読有、2015、pp.103-130.

http://repository.tufs.ac.jp/bitstream/10108/83465/1/acs090006_ful.pdf

武田千香、「役者ヴァスキスと『田舎のオルフェ』—「ブラジルの笑い」の創出—」、東京外国語大学論集第 89 号、査読有、2014、pp.243-270.

http://repository.tufs.ac.jp/bitstream/10108/82040/1/acs089012_ful.pdf

武田千香、「記憶のオセロウ—『ドン・カズムッホ』と自伝的記憶」、東京外国語大学総合文化研究所、『総合文化研究 Vol. 17』、査読無、2014、pp. 19-36.

<http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/76244>

武田千香、「マルチンス・ペーナとブラジル文化—文字化された「ブラジル」—」、東京外国語大学論集第 87 号、査読有、2013、pp. 169-195.

http://repository.tufs.ac.jp/bitstream/10108/77190/1/acs087009_ful.pdf

〔学会等発表〕(計 7 件)

武田千香、シンポジウム「ブラジル文化のアリーナ：逸脱の文化表象」、本事業主催、青山 CAY、2016 年 1 月 23 日、パネルディスカッション「逸脱の文化表象」コーディネーター

武田千香、講演「千鳥足の弁証法—ブラジルの生き方にせまる！」、読売新聞立川支局共催 連続市民講座第 8 回「今を生きる～人々が暮らしている/きた世界」、東京外国語大学、2015 年 12 月 5 日。

武田千香、講演「O Brasil que transparece pela literatura machadiana (マシャード文学から浮かび上がるブラジル)」、(ポルトガル語) VII Congresso de Letras Clássicas e Orientais – Homenagem a Leodegário

Amarante de Azevedo Filho e III
Congresso Internacional de Letras e
Orientais (第7回古典および東洋文学
学会) リオデジャネイロ州立大学、2015
年5月5日。(於: ブラジル、リオデ
ジャネイロ市)
武田千香、招待講演「ブラジル—そのジ
エイチーニョの世界」、日本ブラジル中
央協会 第31回ランチョン・ミーティ
ング、アークヒルズクラブ・イーストウ
ィング37階、2015年1月23日。
武田千香、シンポジウム「ブラジル人の
人生哲学 [ジエイチーニョ] の秘密」共
催および講演「心のルールをもつ国、ブ
ラジル」およびパネルディスカッション
参加、日伯かけはしの会、京都大学大
学院総合生存学館(思修館)と共催、国立オ
リンピック記念青少年総合センター 国
際交流棟第2ミーティング室、2014年
10月12日。
武田千香、招待講演「O que é que o
Brasil tem? A Cultura Brasileira
segundo Chika Takeda (ブラジルは何
を持っているか? 武田千香によるブラ
ジル文化)」(ポルトガル語)
Comemoração a 10 anos do Curso de
Graduação de Português-Japonês da
Universidade do Estado do Rio de
Janeiro – UERJ (リオデジャネイロ州
立大学文学部日本語学科創立10周年記
念講演)(2014年8月7日)(於: ブラ
ジル、リオデジャネイロ市)
武田千香、シンポジウム「ブラジルのリ
ズム」共催および基調講演「ブラジルの
リズム」、科学研究費助成事業 基盤研究
(c)「ブラジルの文化における喜劇性
—ユーモア・笑い・遊戯性—」(研究
代表者: 武田千香) サッカーパビリオン
2014年イベント、ブラジル大使館と
共催、2014年7月18日。

〔図書〕(計 3 件)

武田千香、平凡社、『ブラジル人の処世
術 ジエイチーニョの秘密』(平凡社新
書) 2014, 211頁。

マシャード・ジ・アシス、武田千香訳『ド
ン・カズムツホ』、光文社古典新訳文庫、
2014, 556頁。

武田千香、東京外国語大学博士論文、『マ
シャード・ジ・アシスの文学—『ブラ
ス・クーバスの死後の回想』に表われる
ブラジルの文化的特質』、2013, 222頁。

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0 件)

○取得状況(計 0 件)

なし

〔その他〕

武田千香、「ずらしの美学」、『パブリッ
シャーズ・レビュー』 front page essay、
p. 1、2014、白水社。

武田千香、「ブラジル流に軽やかに生き
るための三冊」、『こころ』vol. 17、平凡
社、2014、pp. 42-43

6. 研究組織

(1)研究代表者

武田 千香 (TAKEDA, Chika)
東京外国語大学・大学院総合国際学研
究院・教授
研究者番号: 20345317

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

江口 佳子 (EGUCHI, Yoshiko)
常葉大学・外国語学部・グローバルコ
ミュニケーション学科 講師
渡辺 一史 (WATANABE, Kazufumi)
東京学芸大学・非常勤講師
花田 勝暁 (HANADA, Katsuaki)

東京外国語大学博士後期課程
宮入 亮 (MIYAIRI, Ryo)
東京外国語大学・非常勤講師